



七十七ビジネス振興財団「設立20周年記念講演会」 ビジネスに役立つ脳の話

東京大学名誉教授

養老 孟司氏

4月16日（月）、七十七銀行本店4階大会議室において、財団設立20周年記念講演会を開催いたしました。講師に、東京大学名誉教授の養老 孟司氏をお招きして、「ビジネスに役立つ脳の話」と題してご講演いただきました。

今回はその講演内容をご紹介します。



養老 孟司氏

養老 孟司(ようろう たけし)氏 プロフィール

【略 歴】

- 1937年 神奈川県生まれ
- 1962年 東京大学医学部卒業後、解剖学研究室に入る
- 1981年 東京大学医学部教授に就任
- 1995年 東京大学を退官
- 1996年 北里大学大学院教授に就任
- 1998年 東京大学名誉教授に就任
- 2003年 北里大学を退職
- 2006年 京都国際マンガミュージアム館長就任
- 2017年 京都国際マンガミュージアム館長退任、名誉館長就任

【主な著書】

- 「半分生きて、半分死んでいる」(PHP研究所)
- 「バカのものさし」(扶桑社)
- 「遺言」(新潮社)
- 「“自分”の壁」(新潮社)
- 「養老孟司の人生論」(PHP研究所)
- 「日本のリアル」(PHP研究所)
- 「バカなおとなにならない脳」(理論社)
- 「真っ赤なウソ」(PHP研究所)
- 「養老孟司の旅する脳」(小学館)
- 「かけがえのないもの」(新潮社)
- 「養老訓」(新潮社)
- 「まともな人」(中央公論新社)
- 「脳のシワ」(新潮社)
- 「バカの壁」「超バカの壁」「身体の文学史」(新潮社)

他多数

私は最近、意識のことについて考えています。学問を考えるのは意識ですが、その定義については聞いたことがありません。意識はエネルギーや熱、分子運動でもない。起きてるときにはあるが、寝てしまうとなくなります。寝ていても夢をみている時間はありますが、それでも全く意識のない状態を、みなさんは毎日経験しています。現代は意識中心の社会です。こうした状態は結構、危ないことであることは、後ほど触れます。

感覚に依存して生きる動物

人生の3分の1は寝ているわけですから、意識がある時間は、残りの3分の2だけということになります。意識は自分の意思で出たり、引っ込んだりしているわけではありませんが、意識は自分が一番偉いと思っています。体がどう動くかを決めるのは自分だ、と考えています。しかし、頭を殴られれば一発で意識がなくなるわけで、これは体の法則に従うしかありません。医師は麻酔を使うことで患者の意識を消していますが、こうしたことがなぜ起こるのかは、わかっていません。経験的に、こうなるということがわかっているだけです。最近、世の中も意識の重要性について考えるようになって、1990年代に米国に意識学会が創られました。日本には、まだこうした学会は無いと思います。

私は猫が大好きです。子どもの頃から飼っています。猫を飼っていて不思議だったことは、とてもかわいがって餌をあげたり、ドアを開けたりしてあげるのに、「ありがとう」とも、うんともすんとも言わないことです。言葉をしゃべることが出来ないのです。

これは子どもの頃から不思議だった。ドリトル先生や聖フランシス、明恵上人は動物の言葉を理解す

るといわれます。後に、本を読んだら、動物は音の高さを認識する絶対音感であるとありました。このことについては、私も本を読む前からかなりの確信がありました。解剖して耳を調べると、振動数によって耳の決まった場所が動くからです。

第一次聴覚中枢である脳みその表面は、どんなふうになっているか。これは周波数の順序で等距離に並んでいます。ピアノの弦のようなものです。頭の中にピアノがあるわけです。同じ音なら同じ細胞が興奮するようになっています。

動物は「感覚」に依存して生きています。感覚に依存するということは、「違い」をとらえているということです。犬の嗅覚の能力は人間の1万倍あります。なぜでしょう…？

それは、徹底的に違いを嗅ぎ分けることが出来なければ、生きていくことが出来なかったからです。感覚から入ってくる第一次印象を「感覚所与」と言います。犬や猫などの動物は「感覚所与」を使って生きています。

猫は感覚に依存していますから、絶対音感です。「しろ」と呼ぶ声が異なれば、違う音を聞いています。このように違いを検出するのが感覚なのです。猫に限らず動物は、感覚によって違いをとらえ、世界を把握しています。「しろ」という音をその音の高さを無視して理解させようとしても、無理なのです。

人間は「同じ」にする能力がある

動物は感覚優位ですが、人間はそうではありません。人間には意識があり、感覚を使わない方向へと向かって進んできました。人間は「感覚所与」を無視して、抽象化して「同じ」にすることが出来るようになった動物です。赤ちゃんは、絶対音感に違いありません。音痴を定義するなら、「音の高さは違って同じ曲と信じて歌える能力」となります。



メロディーが同じなら違った音を同じとみなすことができる能力です。これは人間にしかない能力でしょう。

この同じにするという能力は、人間の意識特有のもので、例えば、リンゴは、赤くても、青くても木になっていても、テーブルにあってもリンゴです。それぞれに違うにもかかわらず、同じリンゴとして認識します。人間の意識の特徴は「同じにする働き」にあります。それは言葉がもたらしたものです。

子どもは感覚のほうが強いのですが、次第に意識のほうが強くなっていきます。人間の感覚優位の時代は中学生くらいまでです。中学生で決定的になります。数学で代数を学ぶからです。数学は「同じ」にする学問です。リンゴでもイワシでも、ひとつなら1という数字です。違いを無視しないと数にならないわけです。

代数には数字だけでなく、文字が入ってきます。 $x=3$ 、 x は3ではない、なぜイコールなのか。 $a=b$ となると、反乱を起こす子どもがおります。 a は**b**でない。もう数学は勉強しない、と。 $a=b$ が気にいらぬ人は当然にいます。しかし、多くの人はこちらをのみ込みます。次に出てくるのが、 $a=b$ なら**b** $=a$ 、という交換の法則です。

宋の時代の故事成語に「朝三暮四」があります。宋の狙公が、飼っていたサルたちの餌を減らすとき、トチの実を朝3個、夜4個にすると言ったら、サルたちが怒ったので、朝4個、夜3個にすると言ったら喜んだという故事です。全体のトチの実の数は7個で変わらないが、朝の方が先に1つ多く餌が手に入るわけで、先の見通しをつけられないことを言い表しています。これは交換の法則であり、サルはこれを理解することができません。

チンパンジーと人間の遺伝子の98%は同じです。違いは2%だけです。しかし、動物は交換ということを理解できず、経済活動というものはありません。7個のトチの実に変わりはありません。人間はそれを理解できます。

ここで大きな問題が登場します。それは「交換」ということです。しかもそこに「同じ」という言葉が付きまします。「等価交換」です。そして人間は交換する道具をつくり出しました。それがまさに「お金」です。価値が同じとみなして交換するのです。お金は「等価交換」のために使われます。動物には等価も交換も理解できません。動物にはお金を理解することは出来ず、猫に小判といいます。日本人はその本質を見抜いていたのかも知れません。

相手の立場に立って考える能力

もうひとつ、人間に特有なことがあります。それは社会の構築です。チンパンジーはボス社会です。人間の社会にはそれに近いところもありますが、また、異なるところもあります。

チンパンジーと人間の遺伝子の98%は同じと言いました。ところが、欧米にはキリスト教という背景があります。人間は神のつくったものですから、動物と違うはずだと考えます。同じでは困ってしまいます。そこで、どこが違うかと本気で考えました。

ある研究者が、自分の子どもと同じ時期に生まれたチンパンジーを兄弟として育て、発育の状況を調べました。大雑把に言えば、3歳頃までは、どんな能力においても人間はチンパンジーより劣っています。しかし、それから5歳位までの間に、人間の能力は急激に伸び、チンパンジーを凌駕します。

どのような変化か、認知科学者が調べました。3歳児と5歳児の集団をつくり、それぞれ実験をします。部屋に大きな箱を2つ起きます。お姉さんがやって来て、Aの箱に人形を入れ出て行きます。後から中年の女性がやって来て、Aの箱の人形を取り出してBの箱に入れて出て行きます。そしてお姉さんが人形を取り出すためにやって来ます。どちらの箱をお姉さんは開けるかと尋ねてみます。人形がAの箱に入っているというお姉さんの信念を理解出来るか…という問題です。

3歳児はBの箱と答えます。これは自己中心的で、自らの立場・視点からしか物事を見ることが出来ないということです。人形はBの箱に入っているのです、当然に知っていなくてはならないという、実力主義、腕力主義の世界です。ところが、5歳児は、お姉さんは人形がBの箱に入れられたのを知らないので、Aの箱を開けるといふ、お姉さんの立場に立っ



て推測することが出来ます。

このように、5歳位になって初めて立場の交換、ということが出来るようになります。心理学者はこれを「心の理論」と言いますが、私は「立場の交換」といったほうが良いのではないかと思います。

私たちが他人を理解できるのは、せいぜい、人の立場に立ってみることでないでしょうか。人の立場に立ったときの、自分というものを想像することは出来ます。人を理解することは自分自身を理解しなければ出来ません。どんな立場の人のことも、理解することが出来るという想像力を持つ人は、それほど多くはないでしょう。しかし、人は動物と違って他人の立場に立つことが出来ます。そこから出てくるのが、おそらくは皆が平等であるという民主主義の考えでしょう。

人は皆、違いがあります。大きい人、小さい人、丈夫な人、弱い人、様々です。感覚からとらえる限り平等であるわけがありません。しかし、人間はそれぞれの立場を交換することが出来るということが、人間の社会を基礎づけています。

このように、人間は経済活動をし、民主主義の考えをつくりだしました。人間は基本的に意識を持ち、「同じ」という能力を持ったものであるということに収斂しゅうれんしていきます。

意味あるものばかりの世界の怖さ

私たちが生活で言葉に触れる時間は、ひたすら長くなっています。言葉を聞いている時間は、江戸時代の人より遙かに多いはずですが、それが究極的に煮詰まった世界が、1と0というデジタルの世界です。1と0によって、論理でも何もかもやってしまう。問題解決のための手順を表す、アルゴリズムというコンピューターの世界です。これを、未来世界のことだという人がいますが、私はとうの昔にこの世界に入っていると思います。

もう20年も前から大学病院にやってくる患者さんは、同じことを言ったものです。「先生方は、私の顔を見ないでカルテやパソコンばかり見ている」と…。

私の銀行での経験です。窓口で「本人確認の書類を持っていますか？」と聞かれました。健康保険証でもいいと言われましたが、病院に来たのでもないので持っていませんでした。行員は「困りましたね、本人であることはわかっているんですが」と言うんですね。

数年間、このことが引っかかっていました。そして、ハッと気がつきました。医者が求めていたのは



検査の結果であって、そのときの患者本人はノイズであると。ノイズは、コンピューターに望ましくない妨害を与える不要なデータです。銀行でも病院でも、人は拒否され検査結果や確認書類だけがあればいい。だって、人間本人はうるさいし、機嫌悪いときもあるし、臭い。これらは全部ノイズです。現に生きている人間はノイズであって、こうしたシステムが進んでいった結果、人間はいらないよ、という世界になっています。

日本は明治以降、西欧の近代的自我を取り入れようと躍起でした。まだ足りないから、もっと取り入れようとやってきました。だから現在は、理想的な時代になってきたのでしょうか。でも変です。その典型例は、神奈川県相模原市の津久井やまゆり園の19人殺害犯です。入所者は働くこともできず、施設に入ったままで、そうした人たちの生活を維持するため税金を払っている人たちは犠牲者だ。生きていても意味のない者を殺害して、犠牲者を救っているので、自分は救世主であると主張しています。

世界を意味のあるもので満たすことは、恐ろしいことでもあるわけで。ここには自分が稼いだお金は自分のもの、自分の体は自分のもの、という考えがあります。私がこのことを考えるようになったのは、小学生が自殺するようになったからです。親が、世間が、暗黙のうちに、そのように教えているということはないでしょうか。

学生を外に連れ出し、田んぼを指さして「あれは将来の君たちだ」と言っても、彼らは理解しません。稲が育って、コメになって、それを食べて自分の体がつくれます。人間も最初は零コンマ2ミリの「タマッコロ」の受精卵でした。それが子宮に着床して、妊娠します。そして50キロ、60キロと成長していきます。人間は、田んぼや海からの贈り物の、なれの果てなのです。これは生物が生じてから、ずっと続いてきたことです。昔の人は、そのことを

知っていました。土から出て、土に還ると言います。個人はいずれ消えてしまいますが、この「タマッコロ」は永続し、受け継がれていきます。これが科学的な考えです。

ところが、若い人はそう考えていません。生まれてきた以上は、自分の体は自分のもの。自分が死んで、親兄弟が悲しむのも知ったことではない。そうなりかけていると、私にはどうしても思えます。

たまには感覚の世界の田舎暮らしを

スマップの「世界に一つだけの花」という歌。歌っている学生に尋ねます。世界に2つある花を見たことがあるか、あるならば持ってきてほしい、と。花が2つあれば別のものに決まっています。感覚でとらえればすべてのものが違います。しかし、それを花という言葉にすると同じになります。若い人が言いたいのは、隣のこいつと自分は違う。だから一緒にしないでくれ、ということでしょう。これは当たり前のことなので、これくらいのことは全体の合意になるでしょう。抽象的には人間で一緒だが、感覚でとらえれば一人ひとり違います。

政府は、国民一人ひとりに背番号を振りました。マイナンバーです。これが現代社会の趨勢でしょう。でも、こうしたことはもうやめにしたほうがいいと、多くの人が気づいています。こんなことをしているから、コンピューターが主体になって、人間はノイズという訳のわからない時代になっているのです。生きているとはどういうことかと尋ねると、どうしていいかわからない、という答えが返ってきます。人間が生きにくい時代になっているのです。都会は、意味ばかりがある世界です。たまには自然の残る田舎で、生活をするをお勧めします。

私は医師になり、解剖学を専攻しました。当時、解剖学なんて若い者のする学問ではなく、解体新書の杉田玄白がやったようなものかと笑われました。でも、古くからあるものは、本当は非常に重要なものです。解剖学なんてわかりきったことのように思われますが、その神髄を説明出来るかといえば、出来るものではありません。昔から偉い人が大勢でやってきた分野だから、それを超えようとするは大変なことです。だからこのようなことだけを一生懸命やっていたら、多少はツブシがきくようになり、おかげで80歳の現在まで、元気でくることができました。人の役に立つことを一生懸命やっていたら、自ずと立つことが出来るようになるのだと思います。